様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 1　日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19520055
研究課題名（和文）　慧均『大乗四論玄義記』に基づく中国南朝仏教学の再構築
研究課題名（英文）　Reconstruction of Buddhist Studies in the Southern Dynasties of China Based on Huijun's *Dasheng silun xuanyi ji*

研究代表者　菅野博史
（KANNO HIROSHI）
創価大学・文学部・教授
研究者番号：50204805

研究成果の概要（和文）：

(1)　『大乗四論玄義記』のテキスト研究の成果として、慧均撰・崔鈆植校注『校勘　大乗四論玄義記』（金剛学術叢書２、金剛大学校仏教文化研究所、2009 年 6 月）が刊行され、写本の研究はおおむね果たされた感がある。今後はテキストの訳注を含む内容の解読が研究の中心となると思われる。私は、ラフではあるが、テキスト全体の訓読訳を遂行した。今後は、訳注の水準を上げるように努力し、公開できるようにしたい。

(2)日本印度学仏教学会や海外の学会で、『大乗四論玄義記』に関する専門の論文をいくつか発表公開した。

(3) 日本印度学仏教学会第 60 回学術大会（2009.9.9、大谷大学）において、韓国・日本の学者を招き、「『大乗四論玄義記』とその周辺」というパネルを組織し、その代表者を務めた。自らも、「慧均『大乗四論玄義記』の研究の歴史と研究の意義」と題して口頭発表をした。

(4)南朝の仏教学研究の一環として、『大乗止観法門』、『法華経文外義』、『法華文句』などのテキストに関する研究論文を発表した。

研究成果の概要（英文）：

(1) The textual edition of the *Dasheng silun xuanyi ji* (in Korean, *Daeseung saron hyeonui gi*), which was written by Huijun (in Korean, Hye' gyun), was published by Choe Yeonshik in 2009 in Korea. This book included detailed research on some extant manuscripts. We can now concentrate on producing an annotated translation and conducting philosophical research. As I made a draft translation of the text in its entirety, I would like to polish up the translation and publish it in the near future.

(2) I presented some papers at the annual conferences of the Japanese Association of Indian and Buddhist Studies and some conferences abroad, and published them.

(3) I organized a panel on "The *Dasheng silun xuanyi ji* and its Relevant Problems" at the 60th annual conference of the Japanese Association of Indian and Buddhist Studies and invited some scholars from Japan and Korea. I also made a presentation of "The History of the Research on Huijun's *Dasheng silun xuanyi ji* and its Significance" by myself.

(4) Concerning Buddhist studies in the southern dynasties, I published some papers on research on the *Dasheng zhiguan famen*, the *Fahuajingwen waiyi*, and the *Fahua wenju*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
19 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
20 年度	900,000	270,000	1,170,000
21 年度	1,000,000	300,000	1,30,0000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学
キーワード：慧均, 『大乗四論玄義記』,三論宗

１．研究開始当初の背景

日本における中国仏教の研究は、隋唐仏教の研究が大勢を占める現状であるが、南北朝時代の教学が隋唐仏教の背景にあったことも忘れてはならない歴史的事実である。しかしながら、当時の資料はほとんどが散逸し、極端に少ない状況である。このような状況ではあるが、幸いに三論学派の慧均（?-574-?）の『大乗四論玄義記』十二巻（『大日本続蔵経』1-1-74-1）は、二諦義・感応義・仏性義などの南朝仏教学が盛んに議論した概念について整理を加えており、重要な資料であるが、従来、十分には研究されていない。

２．研究の目的

南朝仏教学の研究の大きな意義に鑑み、また『大乗四論玄義記』の資料的価値を重視し、あわせて、吉蔵『大乗玄論』、その他の資料を用いて、できるだけ南朝仏教学の全体像を再構築したいと考えた。

３．研究の方法

(1)『大乗四論玄義記』の写本の研究を遂行すること、

(2)該書に引用される南朝の諸論師の逸文を収集・整理すること、

(3)『大乗四論玄義記』の訓読訳を作成すること、

(4) 『大乗四論玄義記』を通して南朝仏教学の思想的側面に光を当てることである。

４．研究成果

(1)　日本における『大乗四論玄義記』の研究は、大谷大学の横超慧日氏による「初章中仮義」の発見から始まった。その後、1970 年に、同じく大谷大学の三桐慈海氏によって『大乗玄論』の「八不義」が実は『大乗四論玄義記』の「八不義」と同一であることが報告された。一方、伊藤隆寿氏は、三桐氏よりも 1 年早く、1969 年に『大乗四論玄義記』に関する論文を発表した。伊藤氏は、引き続き、『大乗四論玄義記』に関するいくつかの論文を発表し、1974 年から 1976 年にかけては、三桐氏の「初章中仮義」の翻刻の提供を受けて、長編の「三論教学における初章中仮義」上・中・下を発表した。ちなみに、この「初章中仮義」は、崔鉉植校注『校勘　大乗四論玄義記』に収録され、これによって「初章中仮義」がはじめて公開されたことになる。

伊藤氏の当時の研究は、1976 年に終わった。一方、三桐氏はその後、1996 年まで、「二諦義」「二智義」などについての論文を発表した。

その他、福島光哉氏、森江俊孝氏、諏訪隆茂氏の論文は、感応思想を解明する過程において『大乗四論玄義記』「感応義」を利用したものであった。また、仏性思想を解明する目的のために、『大乗四論玄義記』「仏性義」を部分的に利用する論文もいくつかあった。

このような研究情況のなかで、『大乗四論玄義記』のテキスト研究の成果として、慧均撰・崔鈆植校注『校勘　大乗四論玄義記』（金剛学術叢書２、金剛大学校仏教文化研究所、2009 年 6 月）が刊行され、写本の研究はおおむね果たされた感がある。今後はテキストの訳注を含む内容の解読が研究の中心となると思われる。私は、ラフではあるが、テキスト全体の訓読訳を遂行した。今後は、訳注の水準を上げるように努力し、公開できるようにしたい。

(2)日本印度学仏教学会や海外の学会で、『大乗四論玄義記』に関する専門の論文をいくつか発表公開した。

拙稿「『大乗四論玄義記』の基礎的研究」（『印度学仏教学研究』57-1，2008.12，pp.61-69L）と「『大乗四論玄義記』の研究序説 ― 自己の基本的立場の表明」（『불교학리뷰』５，2009.6，pp. 65-90，Geungang University）において、『四論玄義』の思想的立場を明らかにする方法として、書名に見られる「三論」「四論」「無依無得」「大乗」などの概念について考察した。また、それと関連して「不二而二明之」についても言及した。さらに、『四論玄義』の学系を明らかにするために、「一家」、摂山三論学派（僧朗・僧詮・法朗）について考察した。最後に、『四論玄義』に特徴的な「地摂成毘」という前代の教学の取りあげ方に着目し、その用例を紹介し、それらに対する批判点が「有所得」であることを論じた。

また、拙稿「『大乗四論玄義記』における前代教学の批判―「三乗義」を中心として」（『印度学仏教学研究』58-1，2009.12，pp. 501-493L）において、現行本『大乗四論玄義記』巻第十に含まれる「三乗義」（他に「荘厳義」「三位義」が収められている）を選び、「三乗義」の構成と内容について簡潔に説明したうえで、そこに含まれる、前稿で指摘した「地摂両論成毘二家」（『十地経論』・『摂大乗論』・『成実論』・『阿毘曇論』に基づく学派を意味する）に代表される前代教学に対する『四論玄義』の批判について考察を加えた。また、前代教学の批判とは直接関係しないが、「三乗義」の問題として、『法華経』方便品の「無二亦無三」についての興味深い解釈を紹介した。

(3) 日本印度学仏教学会第 60 回学術大会（2009.9.9、大谷大学）において、韓国・日本の学者を招き、「『大乗四論玄義記』とその周辺」というパネルを組織し、その代表者を務めた。自らも、「慧均『大乗四論玄義記』の研究の歴史と研究の意義」と題して口頭発表をした。各パネリストの発表要旨は以下の通りである。

(a)菅野博史（創価大学教授）「『大乗四論玄義記』の研究の歴史とその研究意義」

菅野は、「問題提起」で述べたように、『四論玄義』の研究の歴史を紹介するとともに、近年の『四論玄義』の研究情況を紹介した。また、国内外の『四論玄義』の研究論文目録を作成・提示した。

(b) 崔鈆植（木浦大学教授）「『大乗四論玄義記』の撰述地域及び文体の特徴」

崔氏は、伊藤隆寿氏から『四論玄義』の韓国撰述の可能性を示唆され、その後、ドイツの Plassen 氏との共同研究の結果、『四論玄義』が百済で撰述されたという考えに達した。中国撰述説の問題点として、「耽羅」（現在の済州島）を野蛮人の代表として表している点、呉魯という用語で中国を指している点を取りあげ、一方、百済撰述の根拠として、「今時此間寶憙(寺)淵師、祇洹(寺)雲公」の記述に注目し、寶憙寺は六世紀末頃の百済木簡から確認された百済の寺院であることを指摘した。また、韓国の金星喆氏の崔説への批判に対して逐一再反論を試みた。また、巻末の識語「顯慶三年歳次戊午年(658)十二月六日興輪寺学問僧法安為　大皇帝及内殿故敬奉義章也」に基づき、伊藤氏は新羅撰述の可能性を示唆しているが、これを批判し、「‘大皇(帝)’を新羅国王と想定する場合、『大乗四論玄義記』は顕慶 3 年(658)に初めて新羅に伝えられ、この文献を捧げた‘興輪寺(学問)僧’は百済出身で新羅の興輪寺に滞在した僧、或いは百済に留学して帰国した新羅僧侶ということになるであろう。一方、‘大皇(帝)’を日本の国王と想定する場合は、『大乗四論玄義記』は顕慶 3 年(658)に日本に伝えられ、‘興輪寺(学問)僧’は日本に渡来し活躍した新羅興輪寺出身の僧侶、或いは新羅の興輪寺に滞在し修学して帰って来た日本出身の学問僧ということになるであろう」と述べた。最後に、『四論玄義』の文体の特性として、「変体漢文と‘○○書’」、「譬喩と口語的表現」、「自身の見解を提示する前に、既存の学者たちの見解を詳しく紹介し、その過ちを具体的に指摘している。また仏教教理の基礎的内容に対する問答なども見られる」を取りあげ、『四論玄義』が「 (1) 中国以外の地域で、(2)仏教教学に対する理解が深くない人々を対象にして、(3)講義した内容を記録した文献であること示すものだと考えられる」と結論づけている。

(c)伊藤隆寿（駒澤大学教授）「『大乗四論玄義記』に関する諸問題」

伊藤氏は、第一に、「私は、興輪寺を有名な新羅の寺と考え、法安を新羅僧と見て、新羅の学問僧である法安が入唐して、大皇帝すなわち唐の高宗に本書を献上したものと解釈し、本書を中国僧の作でなく新羅僧の作であろうと推察したのである」と述べ、新羅撰述の可能性も現在のところ排除できないのではないかと提案している。第二に、『四論玄義』の後世への影響として、中国では『道教義枢』、『法華玄義』への影響、韓国では元暁『涅槃宗要』への影響、日本では『四論玄義』の 9 回にわたる筆写、日本三論宗の著作における重視などを取りあげた。第三に、『大乗玄論』が吉蔵撰述ではないこと、『大品遊意』が慧均の撰述であることに論及した。

(d)奥野光賢（駒澤大学教授）「『大乗玄論』に関する諸問題—「一乗義」を中心として—」

奥野氏は、『大乗玄論』の吉蔵撰述に対する疑惑を、たんに印象にとどめるのではなく、厳密に文献学的に検証するために、「一乗義」の全文について、発見できる限りの吉蔵の他の著作との対照表を示し、次のように結論づけた。「『一乗義』は吉蔵の先行する著作の多くの文脈に依拠して成立しており、そこには機械的とも思われる繋がれ方も散見された。また、『一乗義』中には決定的証拠とは言えないまでも、かなりその著者性に疑念を抱かせるに充分な諸点も存することが明らかになったと思われる」と。なお、「二智義」についても論及された。

(4)南朝の仏教学研究の一環として、『大乗止観法門』、『法華経文外義』、『法華文句』などのテキストに関する研究論文を発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

1) 『大乗四論玄義記』における前代教学の批判—「三乗義」を中心として（査読有，『印度学仏教学研究』58-1, 2009.12, pp. 501-493L）

2) 《法華文句》的四種詮釈方法—与吉蔵的詮釈方法的比較（『佛學研究』総 18 期，北京，2009.12，pp. 186-192）

3) 《法華経文外義》研究序説（李四龍主編『佛学与国学—楼宇烈教授七秩晋五頌寿文集』所収，九州出版社，2009.12，pp. 76-86）

4) 『大乗止観法門』中的 “本覚” 和 “不覚” 概念（『宗教研究』2008，2009.7，pp. 37-49）

5) 『大乗四論玄義記』の研究序説—自己の基本的立場の表明（『불교학리뷰』５，2009.6, pp. 65-90，Geungang University）

6) 中国対《法華経》思想的接受（『仏教与中国伝統文化—楊曽文先生七秩賀寿文集』pp. 468-477、中国社会科学出版社、2009 年 3 月）

7) 中国における『法華経』見宝塔品の諸解釈—宝塔出現と二仏並坐の意義を中心として—（『創価大学人文論集』21, 2009.3, pp. 11-27）

8) 『大乗四論玄義記』の基礎的研究（査読有，『印度学仏教学研究』57-1，2008.12，pp.61-69L）

9) 中国佛教対《法華経・見宝塔品》的諸解釈—以宝塔出現与二佛并坐的意義為中心（『佛學研究』総 17 期、2008 年 12 月，pp. 223-228）

10) On the Concept of “Salvific Impetus” and “Resonantal Stimulus and Response” in the Early Periodof Chinese Buddhism, Focusing on the Case of Daosheng and Sengliang, （『多田孝正博士古稀記念論集　仏教と文化』51-74 頁［右］、山喜房仏書林、2008 年 11 月）

〔学会発表〕（計 7 件）

1) 2009.11.21　武漢大学主催「中日韓天台宗学術対話国際研討会」において「《法華文句》的四種詮釈方法—与吉蔵的詮釈方法的比較」と題して発表。

2) 2009.9.9 第 60 回日本印度学仏教学会学術大会において、パネル代表者として、「『大乗四論玄義記』の研究の歴史とその研究意義」と題して発表。

3) 2009.2.26　韓国、金剛大学校仏教文化研究所主催「第二回学術セミナー、『大乗四論玄義記』とその周辺」において、「『大乗四論玄義記』の研究序説—自己の基本的立場の表明」と題して発表。

4) 2009.9.8 第 60 回日本印度学仏教学会学術大会において、「『大乗四論玄義記』における前代教学の批判」と題して発表。

5) 2008.10.26　中国・北京の中国人民大学に

おける第 3 回中日佛学会議ににおいて、「吉蔵論佛教争論与批判的方法—以関于《法華経》宗旨観的争論為中心」と題して発表。

6) 2008.9.4　第 59 回日本印度学仏教学会学術大会（於: 愛知学院大学）において、「『大乗四論玄義記』の基礎的研究」と題して発表。

7)　2008. 6.27　第 15 回国際仏教学会（IABS, 開催地: アトランタ）において、“On the Concepts of ‘Salvific Impetus’ and ‘Stimulus and Response’ in the Early Period of Chinese Buddhism: Focusing on the Cases of Daosheng and Sengliang”と題して発表。

〔図書〕（計 2　件）

『法華文句』（Ⅱ）（2008.9, 第三文明社）

『法華文句』（Ⅰ）（2007.6, 第三文明社）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
菅野，博史（KANNO HIROSHI）
創価大学・文学部・教授
研究者番号：50204805

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：